

## 2005年度 ジュマ・ネット活動報告(案)

### 1 はじめに

ジュマ・ネット 代表 下澤嶽

2005年を振り返ると、チッタゴン丘陵の状況は良くなったとはとてもいいがたい1年であった。小さな土地収奪と軍の人権侵害はこれまでどおり続いており、和平協定の実施の可能性もほとんど聞かれなかった。

そんな中でジュマ・ネットの活動は、積み残した活動も一部あったが、計画した事業の多くが実施され、新しい成果を生み出すことができた年であった。

その中で印象深い出来事を3つ紹介したい。

最初はず、スマナランカ僧正の11月の来日である。予定していた青年二人はパスポートが取得できずに来日が果たせなかった。スマナランカ氏は精力的にスケジュールをこなし、関東中心ではあったが、多くの支援者に現状を訴えることができた。これによって支援者の多くが具体的に現場の事実を知るだけでなく、問題の重要性を感じることもできた。同時並行に開発を進めていた平和学習ワークショップも好評であった。

二つ目は2006年2月に実施した平和ミッションである。日本人8名の参加となり、予定したマハルチャリの寺院が完成しその開所式に立ち会うこともできた。今年はカグラチャリの県知事や難民タスクフォースのメンバーと新たに会うことができ、現地の政治状況と軍の支配の形態を学ぶことができた。訪問中にガマリダラにおける軍の土地収奪と遭遇し、「小さな土地収奪の連続」というものを体感することができた。

三つ目は2006年3月に実施したイギリス、オランダ、デンマークの人権団体の訪問であった。過去チッタゴン丘陵の課題を熱心に取り上げていた8団体を訪問し、情報交換とあわせて今後の国際運動の展望を話し合った。人権NGO、先住民族関係のNGOは引き続きチッタゴン丘陵の課題に関心があるものの、現状を詳しく知らせる国際的なチッタゴン丘陵専門のグループがないことが、運動の後退を作っていることがわかった。今後のジュマ・ネットの活動の国際化のイメージを整理することができた。

上記以外にも、多くの活動を実施することができた。詳しいことはこの報告書を読んでいただきたい。これらの活動を支えてくれた運営委員、ボランティアの皆さん、資金的な協力をしてくださった団体や個人の皆さん。本当にありがとうございました。

ジュマ・ネット 代表 下澤嶽

## 現地活動

### (1) マハルチャリ襲撃事件被災者支援活動の継続

2005年度は、マハルチャリ襲撃事件被災者支援活動の2年目にあたった。現地 NGO である PBM ( Parbatya Bouddha Mission ) と共同で、268世帯の被災世帯を対象に、植林用の苗の配布 ( 100世帯 )、被害女性を対象とした織物センターの運営 ( 約 10名の女性 )、小額ローンの貸し出し、児童を対象とした奨学金 ( 100名 ) の配布を行った。

事業全体は比較的順調に推移した。しかし、織物センターは、女性側の要望と運営する PBM 側との意見が合わず、プロジェクトの再調整が必要となった。双方の折り合いがなかなかつかず、近隣のカルバリパラの女性たちがこのセンターに関心を持っていることがわかったので、今後はこの地域の女性たちを対象とした織物センターの再スタートをする予定である。そのため 2005年度内にすべての予算を消化することができなかった。



織物センターの女性たち



果樹の苗の配布

### (2) モドゥプーラ郡ガロ民族のエコ・パーク立ち退き問題への支援活動

2004年1月に発生した森林省とモドゥプーラ郡ガロ住民との衝突事件以来、エコ・パークに関する政府の政策は一時的に停止しており、小康状態を保っている。事件当時の大臣が更迭され、新しい森林省の大臣との対話も数回もたれ、今度の動向を見守る状況となっている。

2006年2月にモドゥプーラの現場を訪問した際に女性グループは5つに増え、地道な活動を進めていることがわかった。しかし、多くの住民は「必ずエコ・パークの工事は再開する。政府は過去も必ずそういう態度で臨んできた」というコメントを繰り返し、不安を感じていることがわかった。また、衝突事件で死亡した遺族への見舞金を出すほか、腰部に銃弾を受け半身不随となった19歳の青年の自立支援を進める予定でいる。

またダッカを中心に組織した女性グループも活動を進めている。ビューティーパーラーで働くガロ女性の実態調査後は、いくつか事例をとりあげ、報告書を作成した。人権侵害などの相談にのるなどの活動を現在も進めている。

### (3) 平和ミッションの派遣

平和ミッションは民族対立が厳しいチッタゴン丘陵に日本人が訪問することで、日本人の関心がこの場所にあることを地域の人々に知らせ、民族対立を緩和し、暴力を抑制することが目的である。



今回は2月11日～18日にかけて表-1のような内容で、学生、NGOのスタッフなど合計8名が参加し、現地を訪問した。2月15日にストライキが発生したため参加者全員が日本大使館を訪問することはできなかったが、その分現地で時間を

多く取り、予定していたより多くのNGOや先住民族の人々に会って道路封鎖に遭遇した一行の車  
 今回のミッションでは、昨年のミッションがきっかけで日本の仏教関係者とジュマ・ネットを通して再建されたマハルチャリ襲撃事件で破壊された寺院を訪問し、完成式に参加した。そして昨年のミッションに引き続き、襲撃された先住民族の村と入植者の集団村を同時に訪ねた。さらに昨年多発していた小規模な土地収奪が発展し、軍が介入のもと大規模な土地収奪が行われている現状を目の当たりにした。ガマリダラでは土地収奪に抗議する先住民族の道路封鎖に遭遇した。この道路封鎖は行政や司法へ訴えても何も対応されないため、何の手段も持たない先住民族の捨て身の抗議行動であり、こどもから老人まで村人総出であった。さらにカグラチャリ県知事と会談したが、行政がこれらの土地収奪に関して介入する力を持たず、チッタゴン丘陵内を支配する軍の力の強さが改めて浮き彫りになった。

また、今回は、市民グループや先住民族NGOの人々と交流を持つことが出来た。昨年同様に日本大使館を訪れ現状報告を行い、チッタゴン丘陵での開発事業に参入しようとしているJICA事務所を訪れ、CHT勉強会を行い、現在のチッタゴン丘陵地帯についての理解を促した。

表 - 1

2月11日(土)	・ 成田→バンコク
2月12日(日)	・ バンコク→チッタゴン ・ 車でカグラチャリへ移動 パートナーNGOのPBMへ宿泊
2月13日(月)	・ 2003年8月に襲撃事件のあったカグラチュリ県マハルチャリ郡を訪問し、現地でジュマ住民との対話、土地の収奪状況の聞き取り。 ・ お寺の完成式に参加(ジュマ・ネットを通して再建したお寺です) ・ シュボ、カズラの村を訪問 ・ ガマリダラの道路封鎖に遭遇 ・ タスクフォース訪問

2月14日(火)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ カグラチャリ県知事と会談</li> <li>・ ベンガル人入植者村への訪問</li> <li>・ 市民グループとの意見交換会</li> </ul>
2月15日(水)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ NGO BRACのカグラチャリ事務所を訪問 話を聞く</li> <li>・ 先住民族 NGO ザバラン事務所を訪問、意見交換会</li> <li>・ 先住民族法律家協会とのミーティング</li> </ul>
2月16日(木)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本大使館訪問、現場の状況を知らせる</li> <li>・ JICAにてCHT勉強会</li> <li>・ 日本人関係者と夕食会</li> <li>・ カグラチャリからダッカへ車で移動</li> </ul>
2月17日(金)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ダッカ→バンコク→</li> </ul>
2月18日(土)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ →成田</li> </ul>

#### (4) マハルチャリにおける土地収奪の実態調査および抗議運動の検討

現地先住民族の二つのNGOで調査グループを作り、チッタゴン丘陵地帯のカグラチャリ県の土地収奪の激しかった4つの郡8つの村を選び土地収奪の実態調査を行った。その成果をレポートとして出版し、欧米やバングラデシュ国内での抗議運動などを起こすことを予定している。

#### (5) マハルチャリの仏教寺院の再建



2003年8月のマハルチャリ襲撃事件の被害にあったレムチョリ村の仏教寺院の再建が日本の仏教関係者からの寄付で行われた。寄付は秋に集まり、寺は2006年2月には完成し、平和ミッション時に完成した寺を訪れた。寺は現地コミュニティーの中心的機能でもあり、人々の心の拠り所であることから、村人からとても感謝された。日本からの支援で建ったお寺ということで、少しでも土地収奪や襲撃の抑

止力となることが期待される。

再建されたお寺

#### (6) 運動を盛り上げるための国際ネットワーク作り(ヨーロッパNGO訪問)

2005年3月5日～19日の2週間、代表の下澤がチッタゴン丘陵問題に古くから関わりのあるNGOや人物を訪ねるヨーロッパ訪問を行った。訪問先は、イギリス、デンマーク、オランダの人権NGO8団体。チッタゴン丘陵問題を解決するための国際キャンペーン



作りのための第1歩となった。

訪問先は Anti-Slavery International(英)、Amnesty International Secretariat (英)、Survival International (英)、IWGIA (International Work Group for Indigenous Affairs) (デ)

で、チッタゴン丘陵の情報交換、国際運動のあり方についてのシェア。オランダのUNPOの事務所で多くの人権団体ではチッタゴン丘陵への関心は強く、より詳細な報告を求めている。現地訪問の多いジュマ・ネットの情報をさらに、こうした団体に伝えていく必要性を感じた。

## 国内提言活動

### (1) 日本政府への提言活動

日本政府には随時チッタゴン丘陵の課題を伝えてきた。今回はバングラデシュのカレダ・ジア首相が来日した7月に抗議集会をジュマ関連のグループ共済で開催し、小泉首相にバングラデシュのODA政策の見直しを訴えた。これらの抗議行動は、バングラデシュの英字新聞にも一部紹介されるなど大きな反響を呼んだ。また、ジュマ関連グループが一同に活動を展開するといった点でも、新しい動きとなった。

また2005年7月には新たに政府のバングラデシュ国別援助計画が提出された。その中にチッタゴン丘陵の問題意識や関与が正式に明記された。これらは2005年にジュマ・ネットが日本政府に行った要請や働きかけの影響が大きい。バングラデシュの日本大使館にも3回ほど訪問し、チッタゴン丘陵の問題、そこにおける開発事業の課題や視点などをシェアする機会をもった。

残念ながら、JICAやJBIC関係者との勉強会を実施するには至らなかった。

### (2) 報告会や勉強会の開催

支援グループや関心のある人の要請に基づき、報告会や勉強会を数回開催した。以下開催実績。

- 2005年4月10日 ボイサビ会場でチッタゴン丘陵の現状報告
- 2005年4月12日 WE21 ジャパン・いずみで報告会
- 2005年4月19日 友の会中央本部で報告
- 2005年5月14日 WE21 ジャパン・あそいで報告会
- 2005年5月15日 WE21 ジャパン・大和で報告会
- 2005年5月22日 WE21 ジャパン・ひらつかで報告会
- 2005年5月24日 WE21 ジャパン・かなわぎで報告会
- 2005年5月28日 WE21 ジャパン・たかつで報告会
- 2005年5月29日 WE21 ジャパン・みやまえで報告会
- 2005年6月10日 東洋大学で講演

2005年6月26日 ジュマ・ネット総会で現地報告会

2005年10月21日 ジュマ・ネット主催の報告会

2005年12月3日 恵泉女学園大学 連続講座で講演

2006年1月29日 平和ミッション勉強会

#### (4) チッタゴン丘陵地帯白書の作成

今年度は、情報の収集と分析を十分実施する余裕がなく、白書の作成は見送った。ヨーロッパの NGO からの要請も考えると、今後この活動は重要性が高いので、今後は隔年でも実施していきたい。

#### (5) 在日ジュマ、D 氏の難民認定と仮釈放の要請活動

昨年度に難民申請が却下され、入管に收容された D 氏の強制送還の反対と仮放免を求める署名活動と、裁判支援を他のジュマ関連団体とともにいった。

幸いにも 2006 年 2 月に 1 年 3 ヶ月收容期間を経て、D 氏は仮放免となった。今後は、難民認定を目指して裁判を闘っていく D 氏を引き続き支援する。

#### (6) カレダジア来日に際する集会と声明発表

2005 年 7 月、バングラデシュのカレダ・ジア首相が来日し、小泉首相と会見を行った。これに合わせて国内のジュマ関連団体は合同で内閣総理大臣と外務大臣あてに要請書を提出するとともに集会を行った。内容は「バングラデシュ人民共和国のチッタゴン丘陵地帯問題解決への積極的な関与と ODA 支援の見直し」で、チッタゴン丘陵での民族浄化や土地収奪、入植政策と、和平条約の不履行をあげ、日本の ODA 支援の適正さの検討と、この問題に対する関与を日本政府に要請した。

この日本での一連の行動がバングラデシュの英字新聞に掲載されたため、一部のバングラデシュ政府関係者に、ショックを与えたという手ごたえがあったとともに、CHT 内でも、日本の中にジュマ・ネットという団体があり、そのようなキャンペーンがなされたことが伝わった。

### 知らせ・交流する活動

#### (1) ボイサビの開催

チッタゴン丘陵のすべての民族がベンガル暦のボイサビと呼ばれる正月を祝う習慣がある。日本でも、4 月 10 日(日)に新宿の常円寺で正月を祝う行事を行った。当日はジュマの料理と文化紹介などを行い、会員やボランティアの交流を行った。同時にチッタゴン丘陵の政治状況を伝える場となった。参加者は子供を含む約 80 名であった。

#### (2) 会報とウェブの作成

多くの日本市民にチッタゴン丘陵の課題を知らせるためにウェブによる状況提供を行った。また、会報3号、4号、5号と臨時号(2回)を作成し、会員・寄付者、関心のある関係者に配布した。

### (3) 平和教育、民族対立理解のワークショップの開発、および国内キャンペーンの実施

チッタゴン丘陵問題を通して、民族対立や紛争の構造を理解する平和教育のためのワークショップ開発をメンバーを募って行った。約10名~20名のボランティアが集まり、ワークショップグループを作った。11月の国内キャンペーンの中で試作発表を5回行い、約80名がこのワークショップに参加した。06年1月DEAR(開発教育協会)の「全国もちよりセミナー」で発表したのち、06年度の改良版の完成に向けて制作を続行中である。

また11月の国内キャンペーンはチッタゴン丘陵地帯よりスマナランカ大僧正を招き、03年8月のマハルチャリ襲撃事件以降の土地収奪について講演を行うとともに、各関係機関を訪問し、記者会見も行った。キャンペーンは1週間にわたって行われ、約230名の参加があった。



スマナランカ師の講演の様子

### (4) 現地先住民族の手工芸品の販売

チッタゴン丘陵の先住民族と、ガロ民族の手工芸品を各イベントなどで販売した。

### (5) カレンダーの作成

チッタゴン丘陵地帯のジュマの人々の写真を配置したジュマ・ネットオリジナルカレンダー2006年を制作し、約200部を売り上げた。ジュマの人々の日常の顔を日本の人々に届けるとともに、現状の問題にも触れ、理解を促す内容となった。

### (6) ブックレットの販売

ジュマ・ネット作成のブックレット『バングラデシュ、チッタゴン丘陵地帯で何が起きているか』を各イベント、報告会、ワークショップなどで販売した。

## 運営体制

### (1) アルバイトのフルタイム化

2005年度は、事務量の増大に伴うマンパワーの確保として、10月から1名のアルバイトを週5日体制にし、スタッフのフルタイム化に近づけるよう努力した。

## (2) 会員、寄付者の募集

3月末の時点で個人会員が107名(111口)、団体会員2団体(6口)、寄付は61件で約170万円となった。

## (3) 総会の開催と役員の見直し

2005年6月26日総会を実施した。運営委員が2名新たに増え、代表1名、運営委員8名、監査2名となった。

## (4) 他団体との連帯

2005年7月のカレダジア集会、難民申請拒否Dさんを支援する活動を通して、国内のジユマ関連団体と連帯を行った。



事務所でスマナランカ師を囲んでミーティング